

はじめに

漢方鍼灸会が発足して15年になりますが、精気神論を行うのは初めてだと思います。

もちろん精気神それぞれについては発表がありました。特に「気」についてはこれまでも多くの発表がありましたので、本日は「精」と「神」を中心に話をさせていただきます。

本会は、従来型の経絡治療から脱却し、経絡治療に生理病理（気血津液論）と脈状診を取り入れ研修を行いその治療を「漢方鍼治療」と命名しました。

漢方鍼治療の基本

本会が行っている漢方鍼治療の基本的概念としては、

『陰主陽従』

『病は五蔵精気の虚より始まる』

『内傷無ければ外邪入らず』

『生命力強化』

『未病治（治未病）』

これらを治療の柱として行くのであれば、精気神論の位置づけはかなり重要となります。

素問・靈樞から精気神の書かれている用語を検索すると「気」が最も多く、2619

「精」は202、「神」は178有ります。

このことから、古典医学における精気神の重要性がわかります。

大宇宙と小宇宙

陰陽五行が宇宙森羅万象の営み（風・雨・寒・暑などの気象変化）を語る上での基本的考えで有るのに対し、精・気・神の三者は人間の生命現象の発生や変化（健康や病気）の根本になっています。

また、天地人三才が宇宙の自然現象と人間との関わりを示す法則ならば、精・気・神は下焦に位する精と、上焦に位する神と、中焦に位する「気」（水穀の気・穀気・食気）から成り、3焦は人体における天地人三才とすることができます（中焦における後天の気が先天の気を補充していくので、食物の重要なことがわかります）。

邪から生へ、時代の流れ

素問学派の外邪から身を守るための治療

靈樞学派の毒薬や・石を用いることなく、五行穴を運用し経絡を介して微鍼により五臓にアプローチする治療。

「毒薬を被らしむることなく、・石を用いることなからしめんと欲し、微鍼を以て其の経脈を通じ、其の血気を調べ、其の逆順出入の会を営なましめんと欲す。」（靈樞・九針十二原篇第一）

難經の学派は靈樞の考えを更に発展させて八難において腎間の動気の重要性を説き、三十六難において、「命門はもろもろの真精の宿るところ原気のかかるところなり。」と、精気神・命門・三焦の原気的重要性を説いています。

更に、金元時代（1115 から 1368）には、金元四大家といわれる劉完素・張子和・李東垣・朱丹溪ら

が医学の中心となりました。

劉完素（寒涼派）は、疾病は化熱に起因するとし、張子和（攻下派）は、病は邪によるものであるとして、\*寒吐下を治療とする。

中でも李朱医学と言われる李東垣（補土派）の脾胃を補う治療と、朱丹溪（養陰派）の腎陽を補う治療は田代三喜により我が国に伝えられ曲直瀬道三らにより後世派の治療体系を作り上げました。

本会が行う営衛の手法、未病治の鍼はこの医学思想を受け継いだ治療といえます。

本日は素問・靈樞・難經・類經などから古典の条文を引用させていただきながら話を進めさせていただきます。

## I 精

「精」について古典では次のように述べています。

### 【参考①】

「両神相搏ち、合して形を成す。常に身に先んじて生ず。これを精と謂う。」（靈樞・決氣篇第三十）

「人の始生は、先ず精を成す。精成りて而して脳髓生ず。」（靈樞・経脈篇第十）

「生の来たるやこれを精と謂う。両精相うつこれを神と謂う。神に随いて往来する者これを魂と謂う。精に並びて出入する者これを魄と謂う。」（靈樞・本神篇 第八）

「夫れ精は身の本なり。」（素問・金匱真言論 第四）

「男女精を構ひ、万物化生す。」と。「蓋し男女相い構ふ時に当り、両神相い合し、搏して男女の形を生ずる所を成す。これ精は常にその身に先じて生じ、その精あればすなわちその形あり、それこれを「精」と謂うなり。」（易経）

これらの条文からわかることは

両神（陰陽）が合して男女の形を生ずる元を成す。

精は人体が形成される以前の物であり、精があつてこそ始めて形が生じることがわかります。

よって、生命の誕生には、必ず精の存在が必要です。

これらのことから、精とは生殖作用上の精を指し、現在の精子と卵子に近い物であることがわかります。

### 【参考②】

「天一水を生ず。」（易経）

「水はこれ三才(天・地・人)の母。」（道家）

張介賓はこの条文を引用して、類経で次のように述べています。

「精は人の水なり。万物の生はその始めは皆水なり。」と。

つまり、精は人間の水であり、生命は水中よりきたものだとして認識しています。

さらに、「道家の曰く、水は三方の母なり、精は元気の根をなす。」（類経）

これは、精気神の母は水であるが原気の根本は精である事を述べています。

さらに、「形を成すは精に始まり、形を養うは穀にあり。」（類経）と述べています。

つまり、先天の精気が働き、形が作られその形は後天の精である穀気に養われています。 したがっ

て「精」は生命現象に欠かすことの出来ない基礎物質であることが理解できます。

氣と対する時は、精は陰に属し、氣は陽に属します。

「陰主陽従」の基本的考えに基づけば、陽は陰に基づいているので、精は生命活動の根本であると言うことが出来ます。

精は後天の精である水穀により補充されるので、(素問・陰陽応象大論 第五)には

「精不足する者は、これを補うに味を以てす。」と述べています。

この味はすなわち、食物を指しています。

従って精氣を補うのは食べることが一番です。

しかし、我々は治療家ですので

「精は人の水なり」(類経)

「營衛は精氣なり。」(營衛政界編)

など、精について見てきますと、

水(津と液)、衛氣と營氣も水の範疇に属すると考えられる事が出来ます。

本会が行う營衛の手法は五臓を養い五神(魂・神・意智・魄・精志)、五志(喜・怒・思・憂・恐)、を調整して、よりよい後天の精氣(穀氣・食氣)を取り入れる環境作りを行うことが出来ます。

(「食事には氣を遣っています。無農薬野菜を食べています。添加物の入った食品は食べません。などと食事には氣を遣ってもそれを転化、化生する衛氣營氣の働きが衰えていたならば健康を保つことは出来ません」)

(「天地農法が氣(寒熱・温涼)と味(酸・苦・甘・辛・鹹)のエネルギーを多く持ちます。一方、農薬使用・温室栽培・水耕栽培・食品添加物使用・臭いのない食品などは、氣のエネルギーが不足しています」)

そして、これらの関係には「氣」の存在抜きには語れません。

## II 氣

氣についてはすでに会長が八十余種の氣の種類があることを述べています。陰氣・陽氣・精氣・神氣・穀氣(食氣)・衛氣・營氣・宗氣などなど

漢方鍼灸会では「氣」は働き・作用であり、物質的側面で捉えてはならないと定義づけました。

私は物質的側面も有るかな?と感じています。つまり氣が働き作用して物質(形)が生まれる。その物質(形)に氣が作用してそのもの独自の氣が働き生命現象が営まれます。

## III 神

### 【参考③】

「両精相搏つ、これを神という。」(靈枢・本神篇 第八)

「胃は五味を蔵し、以って五臓の氣を養い、而して津液を化生し以って精を成す、精氣充つれば神自ら生ず。」(類経)

これらのことから神は陰陽の二精の結合により、人体が形成された後に生ずる事が理解できます。

(「天一水を生ず。天二火を生ずる」)

## 五臓と五神（七神）

五臓と五神（七神）の関係は素問・靈樞・難経では少しずつ違ってきます。

### 【参考④】

素問では「五蔵の蔵する所。心は神を蔵す。肺は魄を蔵す。肝は魂を蔵す。脾は意を蔵す。腎は志を蔵す。是れを五蔵の蔵する所と謂う。」（素問・宣明五氣篇 第二十三）

靈樞では「五蔵。心は神を蔵し、肺は魄を蔵し、肝は魂を蔵し、脾は意を蔵し、腎は精・志を蔵するなり。」（靈樞・九鍼論篇 第七十八）

難経三十四難では、「五蔵に七神有り、各々何を蔵する所ぞや」と、冒頭から七神を位置づけ、「然るなり、蔵は人の神気の舎蔵する所なり。」と、定義づけて、「故に、肝は魂を蔵し、肺は魄を蔵し、心は神を蔵し、脾は意と智とを蔵し、腎は精と志とを蔵するなり。」（難経・三十四の難）

以上のように、素問では魂・神・意・魄・志の五神を配当し、靈樞では腎に精と志を配当して六神とし、難経では、さらに、脾に意と智を配当して七神としています。

このことは後世に行くに従い、より精神論・内因論が重要視されて、微鍼により五臓精気の充実を図る鍼灸治療が位置づけられていったかが理解できます。

精・神・魂・魄は先天的なものであり、意と智は後天的な物です。

（知識・知恵・意識活動や物事の推理計算など大人になるにつれて五臓が安定してから備わります。）

## IV 外形内気

神の現象には精神思惟活動と望診（形と色）の二つの側面があります。このことを類経では「外形内気」と表現して説明しています。内気は七神のこと。外形は五臓六腑の形とか機能、五主（皮毛・血脈・筋肉・筋・骨）経絡などのことです。この外形内規は陰主陽従、内傷無ければ外邪入らずという漢方医学の基本的考え方につながります。

例えば怪我をするなど外形が壊れても内気が健全であれば自然治癒力で治ります。内気（七神）が壊れたらやがて外形もその働きを失います。七神の中でも特に精が重要であり、神が失われても気が狂うだけで生命は維持できますが精が尽きたら死亡します。

（「難経八の難に寸口の脈平にして死するのは腎間の動気が尽きた物であると述べています。これは精気のことです」）

従って私は内気外形と表現したいですね。

### 1. 内気—精神思惟活動（七神と七情との関係）

#### 【参考⑤】

五志について、「志にありては怒と為り、怒りは肝を傷る。志にありては喜と為り、喜びは心を傷る。志に在りては思と為り、思いは脾を傷る。志に在りては憂と為り、憂いは肺を傷る。志に在りては恐と為り、恐きは腎を傷る。」（素問・陰陽応象大論篇 第五）

「喜べば則ち気緩む、喜べば則ち气和し、志し達し、榮衛通利す、故に気緩む。」（素問・拳痛論篇 第三十九）

「百病は気より生ずるを知るなり。怒れば則ち気上り、喜べば則ち気緩む。悲しめば則ち気消え、恐

れば則ち気下る。・ ・ ・。驚けば則ち気乱れ、・ ・ ・。思えば則ち気結す。」（素問・拳痛論篇 第三十九）

「神 有余なれば則ち笑いて休まず、神 不足なれば則ち悲しむ。」（調經論篇 第六十二）

「心は脈を蔵し、脈は神を舍す。心気虚すれば則ち悲しみ、実すれば則ち笑いて休まず。」（靈樞・本神篇 第八）

「喜樂する者は、神憚散して蔵せず。」（靈樞・本神篇 第八）

「心は五臓六腑の大主なり、精神の舍る所なり。」（靈樞・邪客篇第七十一）

「心は君主の官、神明出ず。・中は臣使の官喜樂出ず。」（素問・靈蘭秘典論篇 第八）

これらの条文に見られるように、心・神は五臓六腑の太守・君主の官と呼ばれ、五神の中で最も高位にあり、他の四神を統括しています。

従って七情が傷られることにより神が失われ心を初めとして他の四臓にも影響を与えます。また他の四神も心を喜ばせるように働いているので、他の四神に問題があれば心にも影響を及ぼします。

心気が正常であれば喜びとなり、心気が旺盛すぎると笑いとなり、心気が不足すると悲しむという精神状態になります。

難經四十九難に、憂愁思慮すれば則ち心を傷る。」と書かれているのもこの理由による物と考えられます。

#### 四十九の難正經自病と五邪

憂愁思慮すれば心を傷る。

形冷え 冷を飲めば肺を傷る。

恚怒し気逆上して下らざれば肝を傷る。

飲食勞倦すれば脾を傷る。

久しく湿地に座し剛力して水にいれば腎を傷る。是正經の自病なり。

七神七情が健全であれば人間は肉体的にも精神的にも健康であるといえます。

その中心となるのが、君主である神であり、喜び楽しめば気が和して營衛が通理して健康となることが出来ます。

（趣味・スポーツ・芸能・仕事など、あるいは落語を聞いて癌を治すなどの治療を行っている所もあります）

## 2. 外形（神と望診）

人体の生理活動と病理変化の結果、外に現れる形証

### 【参考⑥】

望診では

「望みて之を知る、之を神と謂う。・ ・ ・。然るなり、望みて之を知るとは、其の五色を望み見て、以って、其の病を知るなり。」（難經・六十一の難）とあるように、神の変動は精神志意活動のみならず望診上にも現れることが理解できます。

（目の輝きなどは最も解りやすいものです）

（靈樞・混結編には「命門は目なり」と睛明穴を命門と言います。また、靈樞・大惑論第八十には「五

臟六腑の精氣皆上りて目に注ぎて、是が精と成る。」と、目と精神との関わりを解いています。

(自殺患者の例——目に落ち着きがない。焦点を合わせない、無表情で一点を見つめているなど)

脈診では

「心は脈を蔵す。脈は神を舎す。心気虚するときは則ち悲しむ。実するときは笑ひて休まず。」 (靈枢・本神篇 第八) と、神と脈との関係を強調しています。

脈状は

「怒れば則ち気上り、脈微なり。喜べば則ち気緩み、脈散ずるなり。思えば則ち気結ばれ、脈短なり。悲しめば則ち気消し、脈縮なり。憂うれば則ち気沈み、脈・なり。恐るれば則ち気下り、脈沈なり。驚けば則ち気乱れ、脈動ず。」 (診家枢要)

(週に一度来院している患者の例——脈診すると浮・数・で脈に定まりが無いので、「どうしたのですか?」と尋ねたらいきなり泣き出した。さらに「どうされたの?」と尋ねたら、夫の浮気で有った。)

治療は

「神を得るものは昌え、神を失うものは亡ぶ。」 (素問・移精變氣論 第一三)

「刺の法は、先ず必ず神に本《もと》づく。血・脈・營・氣・精・神、此れ五蔵の蔵する所なり。」 (靈枢・本神篇 第八)

「形弊(ヤブ)れ、血尽きて、功立たざる者は何ぞや。岐伯曰く、神 不使なればなり。……。今、精壊れ、神去り、營衛復(マ)た収むべからず。……。故に神これを去りて病癒えざるなり。」 (素問・湯液醪醴論篇 第十四)

これらは、神が充実していれば健康を保つことが出来るが、精・神・氣・血・衛氣・營氣が尽きた物は治療しても無駄であることを述べています。

調經論の治療は

「百病の生ずるや、皆虚実あり。今 夫子乃ち有余に五あり、不足もまた五ありと言えり。何を以てこれを生ずるや。岐伯曰く、皆 五蔵より生ずるなり。夫れ心は神を蔵し、肺は氣を蔵し、肝は血を蔵し、脾は肉を蔵し、腎は志を蔵し、しかして此形を成す。志意通じ、内に骨髓に連なりて、身形五蔵を成さしむ。五蔵の道は、皆經隧に出で、以て血氣を行らしむ。血氣 和せざれば、百病 乃ち變化して生ず。是の故に經隧を守るなり。」 (素問・調經論篇 第六十二) と、述べ、五臓五神五志が安定してこそ経絡が通じ血氣を巡らし健康を保つことが出来ると述べています。

以上のことから、漢方医学では診断・治療・予後に至るまで神の役割の重要性が解ります。

おわりに

【参考⑦】

「神を失う者は死し、神を得る者は生きん。黄帝曰く、何をか神と為すや。岐伯曰く、血氣已に和し、營衛已に通じ、五蔵已に成り、神氣心に舎り、魂魄畢く具われば、乃ち成りて人と為る。」 (素問・天年篇 第五十四)

これは先天の精気である気血が調和し、後天の精気である営衛が通じて、その役割を果たせば五臓は調和し神は心に収まり、精神魂魄は安定して健康を保つことが出来ることを述べています。

精・気・神 三者の関係と三焦の関わり

気—— 気が働き作用して、形（物質的要素）としての精と神に働きが生まれます。

精—— 「精は気の母。」と言われているように、気の産生は精により、精の化生は気に頼っています。

神—— 精気が充足すれば神が旺盛となり、精気が虚せば神は衰えます。

三焦—— 精気神と三焦の関係も見逃せません。

先天の精気に後天の精気が加わった物を三焦の原気といい、腎に宿り呼吸・消化・排泄などが生理的に行われます。

先天の精気（命門）と後天の精気（穀気）を相互保管する役割として三焦の原気が存在します。これを相火と言います。

つまり、上焦に位する神（心・君主之官）は五臓六腑の中で最も重要な位置にあり、人体生命活動を主宰し、その旺盛な陽気を絶えず精に送ります。

下焦はこれを請けて、精（腎・左京之官）は腎気が旺盛となり、精気が満ち、筋骨が充実し、動作が敏捷になります。

その間で中焦・気（脾胃・倉廩之官）は水穀を受納し、精微を運化し全身に栄養を供給します。

したがって、生命現象の基礎は、精気神、津液・血・営衛に三焦が加わり、先天と後天は相互に依存し、相互に制約し生命現象を営んでいます。

故に精気神三者の関係は密接で、精が無くなった者は死に、神が無くなった者も又死亡します。

道家では精気神の三者を三宝あるいは三気ともいい、生命現象の営みとその変化の根本であると重要視されています。

さいごに

類経の言葉を引用して終わりとさせていただきます。

「気が神に入り来ると精となり、神が去り形より離れると死になる。」

「神気が解ると長生できる。堅く虚無を守って神気を養へ。神が生けば気も生き、神が留まれば気も留まる。もし、長生を望むならば、神気を留むべし。神を思いで動かす無かれ。至しむなく、去らしむなく、出でしむなく、入らしむなく、自然として常に留めて是を行え。これぞ神の道路である。」と。

【参考文献】

現代語訳黄帝内経素問、現代語訳黄帝内経靈樞、難経の臨床研究、意釈類経。